



Title	建物の塼敷舗装：四半敷の検討
Author(s)	中川, 二美
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 717-726
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105083
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

建物の塼敷舗装

—四半敷の検討—

中 川 二 美

はじめに

古代の建物基壇の復元を考えると、基壇上面の舗装は課題の一つである。石敷か塼敷、または叩き仕上げかは、建物の印象を大きく左右する。しかし、古代の建物基壇の上面舗装は、建物廃絶後削平されることが多く、発掘調査でも手がかりを得ることが難しい。したがって、多くの場合は出土遺物の検討から、舗装方法を推定することになる。

これに対し、島田敏男は平城宮第一次大極殿の復元に向けて、奈良県薬師寺金堂や大阪府河内国分寺塔、宮城県多賀城廃寺塔・金堂、同陸奥国分寺塔などの事例や出土遺物をもとに基壇上面の舗装を考察し、①基壇上面の舗装には土間、礫敷、塼敷、石敷があり、7～8世紀では格の高い寺院でのみ凝灰岩の石敷が採用される、②塔や小規模な金堂では基壇上面を石や塼で化粧する場合も建物内部は土間仕上げである、③塼や石の敷き方はどちらも布敷と四半敷の二種類存在する、などの指摘をおこなった（島田 2009）。舗装方法は二種類提示されたが、四半敷は大阪府河内国分寺例のみである。日本古代において、四半敷は稀な例なのだろうか。

四半敷に関しては、須弥壇上面の舗装について、大脇潔が法隆寺若草伽藍金堂出土の45度の隅角をもつ流紋岩切石をもとに、「(前略) 須弥壇で、その上面が四半敷であったとするのが妥当であろう。」と指摘する（大脇 2019）。

絵画資料の『年中行事絵巻』では、平安宮大極殿の床面は、石製であろう基壇外装と同じ色調かつ四半敷で描かれる。同じ絵巻の中で大極殿以外の殿舎や門・回廊などの建物は布敷や叩き仕上げと描き分けられている。どこまで写実的かは検討が必要であるが、四半敷はより格の高い建物に採用された可能性を示唆する資料である。

以上は石材を用いた舗装が中心で塼敷の検討は少ない。一方で、須弥壇は緑釉塼を敷き詰めて荘厳される例など、塼敷舗装は複数ある。大脇が指摘するように須弥壇では四半敷が推定される例はあるが、建物床面にも四半敷を採用する例があるかは明確にできていない。

各建物の調査に伴って出土する塼には、四半敷に使われたと推定できる平面形三角形の資料が認められる。塼の四半敷は鎌倉時代以降の禅宗寺院のイメージが強いが、古代の建物の床面にも塼を用いた四半敷が存在したのか検討をおこなってみたい。

1. 塼敷の事例

(1) 検討方法

(i) 敷塼の判断基準

塼は舗装材としての用途以外にも基壇外装などに用いることがあり、出土した塼がどちらの用途に用いられたかは複合的に判断することになる。舗装材としての塼は、a. 断面が逆台形を呈する（目地を通すため、側面にいわゆる「ニゲ」をもつ）、b. 平面に施文される、c. 柱などの部材に対応した形状をもつ、d. 平面の片方だけに使用痕跡が認められる、などの特徴がある。これらのうちの一つまたは複数の特徴をもつものを舗装材と判断する。

これらは塼だけでなく敷石の判断基準にもなる。特に a の断面形状は大きな指標と思われる。

(ii) 使用箇所の判断基準

塼を敷き並べる場所として、須弥壇上面と建物床面がある。後述するように茨城県新治廃寺では、基壇上面に塼が敷かれた状態で残っていた。これらの塼の厚みは約 3.6cm を測り、少なくともこれと同程度の厚みをもつ塼であれば、人が立ち入る箇所への敷塼として使用可能であると考えられる。そこで、使用場所が須弥壇か建物床面かの判断指標の一つとして厚みが 3.6cm 以上の塼であるとしておきたい。

(iii) 四半敷の判断基準

現在見られる四半敷は、二等辺三角形と正方形の組み合わせで敷かれることが多い。ただ、本稿では、桁行・梁行に対して 45 度傾いた方向に目地が通る敷き方であることを重視したい。このため、二等辺三角形にこだわらず、45 度または、合わせて 180 度を成す 135 度の隅角を持つ塼の出土が認められる建物は四半敷きであると判断する。

(2) 塼敷の事例

敷塼の出土は表 1 のとおり 22 件 26 例を認めた。大半が出土塼からの推定であるが、官衙・寺院どちらかに片寄るなどの傾向はみられない。敷き方は布敷、四半敷のどちらも確認される。

(i) 布 敷 き

a. 遺構として敷塼がみとめられた事例

新治廃寺 新治廃寺は金堂とその東西に塔が存在する伽藍配置をもち、奈良時代後期に創建され、同末期には焼失と短期間で存亡する寺院である。金堂基壇上面では、建物外側の舗装は不明であるが、建物内部の身舎内・庇内ともに塼敷が確認された（図 1）。塼は、長辺約 33cm、短辺約 27cm、厚約 3.6cm を測る平面がやや長方形のもので、建物桁行方向に目地を通す布敷である。梁行方向には 2～3 寸ずつずれると報告されている。

表 1 埴敷舗装がみられる建物

遺 跡 名	所在地	時 期	建 物	舗装材の形状	厚 (cm)	敷き方	備 考
前期難波宮	大阪府	7世紀中頃 ～後半		正方形	4	布	断面逆台形
平城宮磚積官衙	奈良県	8世紀後半	通路	長方形	8～9	布	検出遺構
長岡京左京四条一坊 十三・十四町	京都府	8世紀末	不明	長方形で円弧の 割り	7～8	布	埴は奈良時代に製作さ れたものを再利用か
長岡京左京二条二坊 五・六・十一・十四町	京都府	8世紀末	不明	長方形で円弧の 割り	4～5	布	京内離宮または皇族の 邸宅と推定される埴は 再利用したものか
大宰府学校跡	福岡県	8～9世紀		二等辺三角形・ 長方形	6～7	四半	平面上面に文様
多賀城	宮城県	不明		長方形	6	布？	平面上面に文様あり
三河国府	愛知県	8～9世紀	正殿？	方形で円弧の割 り	8～9	布	柱根巻石状の埴と判断
海会寺	大阪府	7世紀第 4四半期	塔？	正方形	6～7	布？	側面の仕口で組み合う 一方の面に格子状のへ ラ文様（接着面を増や すためか？）
上野廃寺	和歌山県	7世紀第 4四半期		正方形	11～12	布？	断面逆台形
法隆寺	奈良県	8世紀前半	西円堂	台形	75		建物の平面形と埴の平 面形
		8世紀前半	東室	正方形	99-45	布？	断面逆台形
		8世紀前半	大講堂	正方形	75	布？	
播磨千本屋廃寺	兵庫県	8世紀中頃		隅角 45° の台形	4.5～5	四半	
紀伊国分寺	和歌山県	8世紀中頃	講堂？	正方形？	8	布？	平面に被熱痕跡
美濃国分寺	岐阜県	8世紀中頃	塔	二等辺三角形・ 正方形	9	四半	
新治廃寺	茨城県	8世紀後半	金堂	長方形	3.6	布	検出遺構
		8世紀後半	塔	長方形	3.6	布	検出遺構
東大寺	奈良県	8世紀後半	東塔	二等辺三角形・ 正方形	6～11	四半	断面逆台形
伊勢国分寺	三重県	8世紀後半	金堂	長方形	7～8	布？	断面逆台形
		8世紀後半	講堂	長方形	7～9	布？	断面逆台形
伯耆国分寺	鳥取県	8世紀後半	金堂	正方形	5	布	断面逆台形
片山廃寺	大阪府	8世紀	塔	二等辺三角形・ 長方形	2～3	四半	側面の接合仕口
尾張元興寺	愛知県	8世紀？		隅角 45°	4.8以上	四半？	側面に仕口あり
池辺寺	熊本県	9世紀	中心建物	長方形	不明	布	検出遺構
飛鳥寺	奈良県	時期不明	金堂	正方形	5～6	布？	断面逆台形 一方の面に格子状のへ ラ文様（接着面を増や すためか？）
北白川廃寺	京都府	不明	塔？	隅角 45 度の三 角形？	4.3	四半？	

西塔でも四天柱の内外で同様の埴敷の一部が残る。金堂と西塔の建物内部の舗装が同様であり、おそらく東塔も同様に埴敷であったと推定できる。

池辺寺跡 9世紀初め頃に創建され、同世紀末頃に廃絶した寺院である。山の斜面に立地し、六棟の建物群で構成される。この中の中心的な建物の基壇上面、身舎内部で埴敷が確認されている。埴は平面長方形で、基本的には桁行・梁行方向に目地を通す布敷きである。

これら2例は存続期間が短期であり、埴敷の時期が限定できる例である。日本古代の寺院で

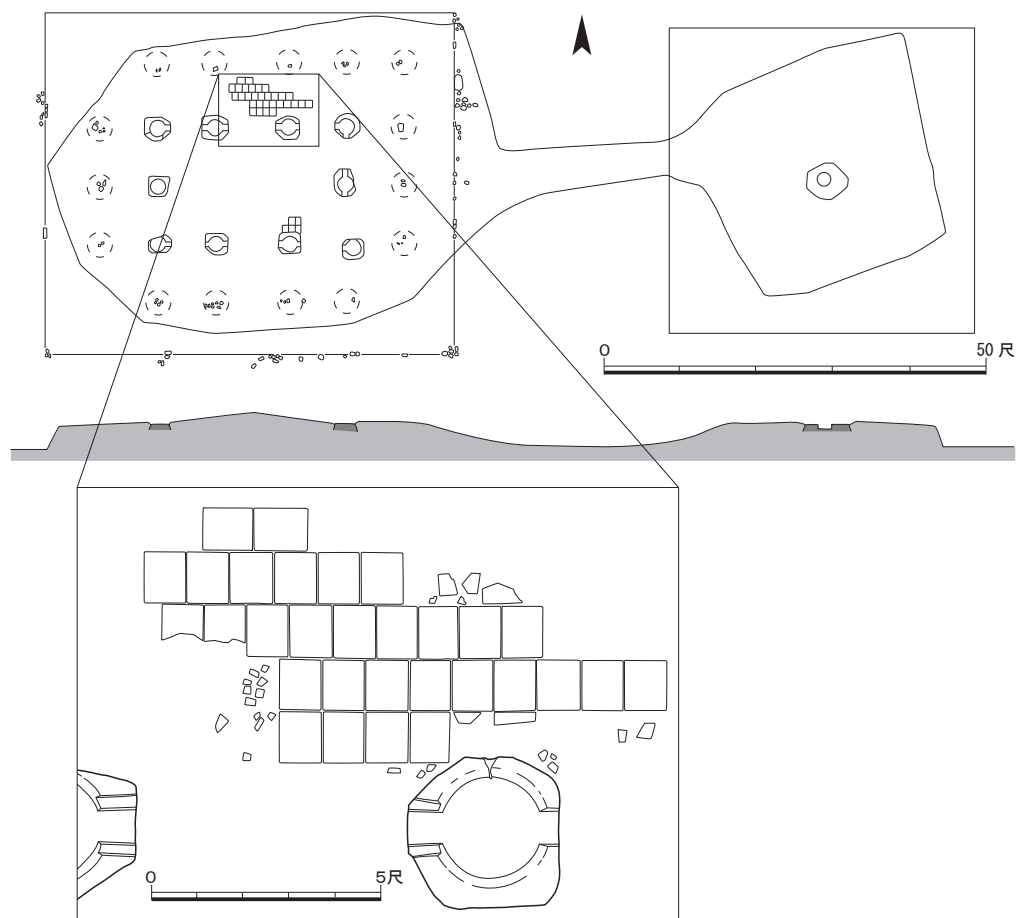


図1 新治廃寺磚敷検出状況

は8世紀、とりわけ8世紀中頃から9世紀という磚の使用が盛行する時期に広範囲に磚を建物床面舗装に用いることが広まっていたことを示している。

b. 出土磚から推定される敷磚例

宮殿でも磚敷が採用される。前期難波宮では平面形は方形に復元でき、断面は逆台形を呈する磚が確認される。平面に被熱痕跡が確認され、朱鳥元年（686）正月の火災により被熱したと解釈されている。三角形を呈する磚の出土は確認できないため、布敷と考えておきたい。

平城宮でも磚の使用は認められ、特に磚積官衙地区は磚が多用される。この地区では長方形の磚を積み上げた基壇のほか、通路にも同じく長方形の磚を敷き詰めて舗装していることが明らかにされている。基壇上面ではないが、磚を敷き並べる例である。

長岡京左京二条二坊五・六・十一・十二町や同四条一坊十三・十四町では、柱周辺に敷くため、平面長方形の磚を焼成後に加工している（図2-1・2）。特に前者は京内離宮もしくは

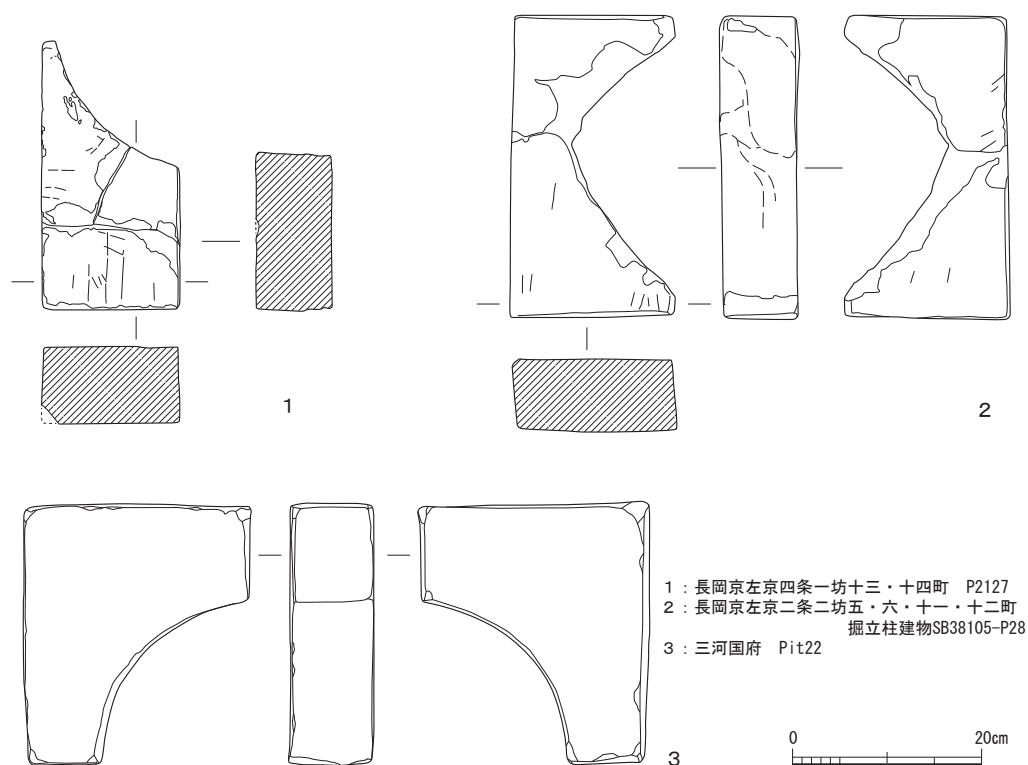


図2 柱を取り囲んで敷けるよう加工された塼

皇族の邸宅と推定される地区で、京内でありつつも官衙的な性格が推定されている。同時に出土する塼も三角形の塼はなく、長方形の塼であることから布敷であったと考えておきたい。

また、愛知県三河国府跡では、平面長方形の塼を焼成前に円弧に削った塼が出土している（図2－3）。長岡京例と同様の目的で作られたのだろう。政庁正殿もしくは後殿の床面舗装用と推定される。長方形のみであることから布敷と考える。

寺院では、詳細な時期が判明するものは少ないが、法隆寺東室の創建期と推定される塼が最古級である。裏面が掘りくぼめられ、断面がコの字形になるように造られている。その他の寺院のものは、出土量が少ないものの、平面形正方形を呈し、逆台形の断面形をもつ塼が散見される。ただし、1点のみなど出土量が少ない事例は今回の検討から外した。

（ii）四半敷舗装

a．遺構として敷塼が認められた事例

塼の四半敷を遺構として検出した古代の例は今のところ確認できていない。

b．出土塼から推定される事例

大宰府政庁（学校院） 長方形と正方形、二等辺三角形の蓮華文様をもつ塼が出土している。

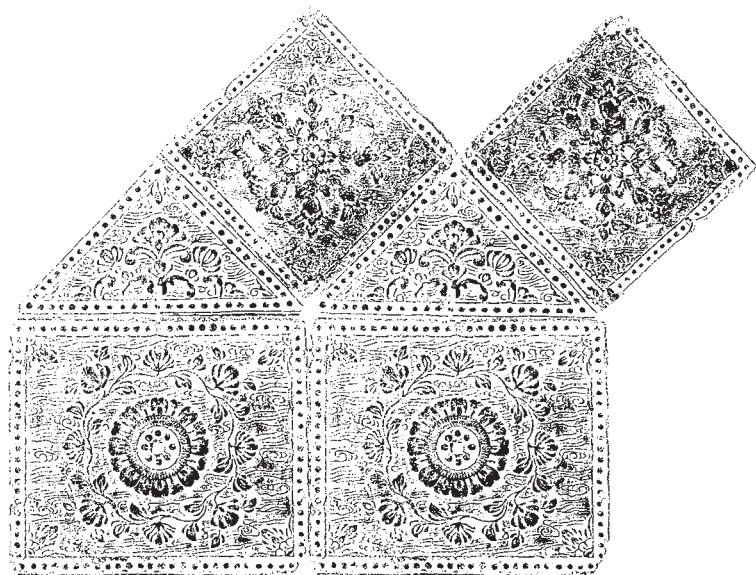


図3 大宰府学校院の埴敷復元案

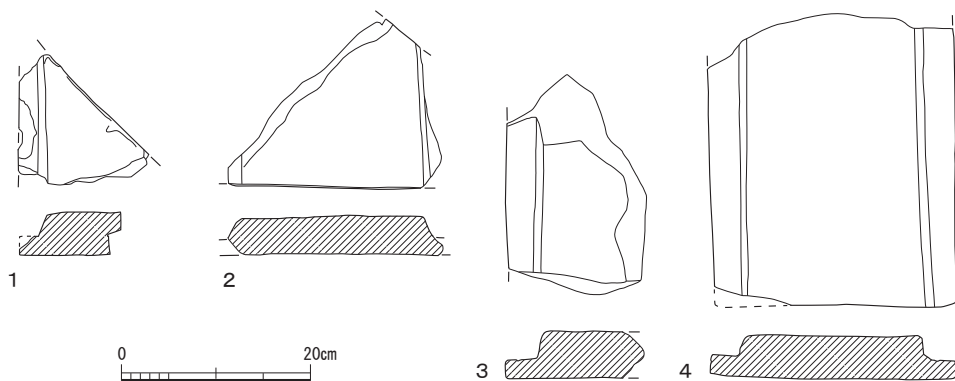


図4 播磨千本屋廃寺塔出土埴

狭川真一は各資料の辺の長さの共通性から、図3のように四半敷に敷くことを提案した（狭川1995）。また、この埴の製作時期は奈良時代の中で納まるとされる（九州歴史資料館2002）ほか、文様には統一新羅の影響があると指摘されている（亀田1983）。現状で宮殿や官衙で四半敷が確認できる唯一の例である。

片山廃寺塔 7世紀末から8世紀初頭の所産と考えられる二等辺三角形の埴と長方形の埴が出土している。側面に仕口を持つものがあり、長方形が2つセットで組み合わせると推定されている。裏面にはへら書きで番付らしき文字が刻まれており、敷き詰める作業も困難であったことが窺われる。長方形の埴でも四半敷舗装と考える例でもある。報告では基壇上面の舗装と指摘さ

れている。厚みは2cm程度であることから、須弥壇上面である可能性も考えておきたい。

播磨千本屋廃寺塔 8世紀と推定される寺院跡である。塔跡と推定される遺構周辺から45度の隅角をもつ塼、135度の隅角をもつ塼、長方形に復元できる塼が出土している（図4）。図4-2は、長

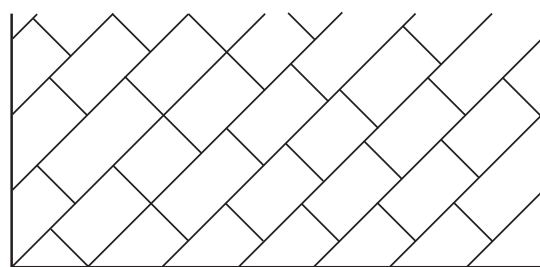


図5 播磨千本屋廃寺塔出土塼の敷き方一案

方形と二等辺三角形を合わせた平面形を呈し、厚みは約5cmを測る。側面には片山廃寺塔跡出土塼と同様に段状の仕口をもち、塼同士が組み合う構造である。報告書ではこれらの敷き方の一例が提示され、八角形の場所に敷く形になっている。塔内の須弥壇が八角形でその上面に敷いた可能性もあるが、この塼の厚みは4～5cmと比較的分厚く、また全体の大きさも大きいことから床面に敷いたと考えてよいだろう。この場合、一般的に塔基壇自体は方形のため図5に示した敷き方を想定する。二等辺三角形と正方形を組み合わせる一般的な四半敷ではないが、桁行・梁行に対し45度傾くことから四半敷の一種と考えたい。

東大寺東塔 平面正方形と大きさが異なる2種類の二等辺三角形の塼が確認され、いずれも逆台形の断面形である。大きい方の三角形塼の短辺長が正方形の一边の長さとはほぼ一致し、四半敷と推定できる。厚みも三角形塼は5～6cm、正方形塼は10cm前後と厚く、床面の舗装材と考える。また、ここでは直角二等辺三角形に復元できる凝灰岩切石も同時に出土しており、基壇上面建物外側が石材による四半敷、建物内部が塼の四半敷と考えられることも注目される。西塔も同様の使用であった可能性が高い。

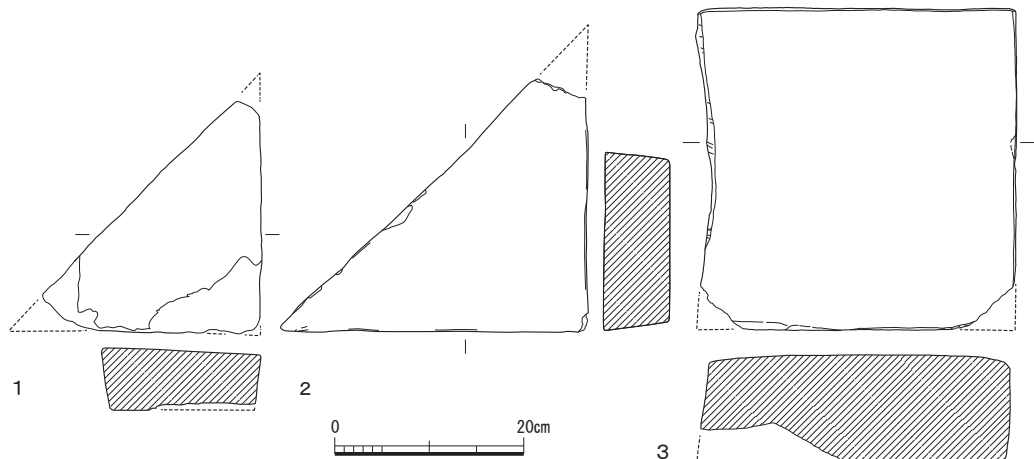


図6 東大寺東塔出土塼

美濃国分寺塔 主要建物の基壇外装に埴積を用いる寺院で、塔周辺から一辺約 30cm の直角三角形を呈する埴が出土し、四半敷と考えられる。基壇外装と一連で上面も舗装するが、建物内部まで埴敷が連続するかは不明である。金堂や講堂なども塔と同様の埴積基壇でありことから、こちらも上面は埴の四半敷であった可能性もある。

以上のように、埴を用いた四半敷は 7 世紀末から 8 世紀にかけて確認できる。また、石材による舗装でも河内国分寺塔と東大寺東塔で四半敷が確認される。大宰府例などもあるが、四半敷が採用されたと考えられる建物の大半が塔であることに注目したい。

(3) 海外の四半敷の事例

(i) 韓 国

韓国では今のところ、679 年に創建された慶州四天王寺で隅角 45 度の緑釉埴を確認している。片方の平面には緑釉が認められる。全形は一辺 18.8cm の二等辺三角形に復元され、厚さ 6.2cm を測る分厚い埴である。須弥壇を飾った埴かとも考えられるが、分厚いことや、四天王寺では四天王像を文様とする緑釉埴が塔の基壇外装として羽目石状に使用されていることから、この三角形埴を基壇上面の舗装材とも考えられる。

また、大宰府学校院の文様埴の文様は統一新羅との関係性が指摘されており、文様だけでなく敷き方も影響を受けている可能性が高い。今後韓国での四半敷の類例が増加する可能性が高い。

(ii) 中 国

唐や渤海は建物の建材に埴が多用される。敷埴と推定できる方形の文様埴もみられるが、現状で三角形の埴は確認できていない。また、やや時期は下るが北宋末期の 12 世紀初頭に刊行された『营造法式』では多様な埴の製作や使用方法について記されているが、三角形埴や四半敷に関するような記載は認められない。石材による舗装も同様である。

一方、敦煌石窟の壁画では四半敷を表していると考えられる箇所を見つけることができた。ただ、作画時の割付のゆがみである可能性も否定しきれない。

以上のように、中国での四半敷例は今のところ認められない。しかし、唐や渤海では様々な建造物に埴を使用しているので、こちらも今後類例が見つかる可能性が高いと思われる。

2. ま と め

古代の官衙や寺院では 8 世紀半ば以降に埴敷の採用が盛行し、四半敷は一般的ではないものの、確実に採用されていることが明らかになった。塔内部も埴敷舗装と推定される例が存在する。四半敷は、格が高い舗装と考えられていた可能性がある。その上、布敷と比較して資材を準備する段階で入念な割付計画とそれに沿った資材準備が必要となるため、簡単に採用できる

ものではない。磚の製作前には詳細な割付計画が存在したと考えてよいだろう。ただ、事例数の少なさや、他の主要堂宇と同時に基壇上面の舗装が判明する事例が限られるため、格の上下を比較することは難しい。ただ、寺院の中心的な建物の一つである塔を中心に採用される傾向は認めても良いだろう。それは、鎌倉時代以降の宋の影響を受けた禅宗様寺院などでみられる四半敷と直接的には連続するものではないと考えられる。

今回取り上げた事例の以外にも磚が出土する建物は多数存在する。ただ現段階では出土量が限られていたり、所用建物が不明であったりと使用方法が検討できる事例は限られた。しかし、各遺跡の調査や資料の検討が進むことで、建物床面への磚敷の可能性が考えられる事例が増えると思われる。特に、四半敷であっても三角形磚は基壇縁の部分でしか使用されないため、方形の磚と比較して使用量そのものが少なく、現段階で布敷と判断した事例でも調査や検討が進めば四半敷と判明する事例はあると予想される。

基壇上面の舗装はこれまで検討される機会が少なかったが、舗装の検討によって、特に建物内部の印象が変わる可能性がある。寺院の堂宇の場合、金銅などの煌びやかな荘厳を引き立てる視覚的な影響も考えていく材料となる検討対象であると考えられる。

謝 辞

学生の頃、福永先生からの厳しいご指導は、それはそれは恐ろしいものでした。が、卒業後、研究室に伺った際、「中川さんが来るから買ってきたんだ。」とドカジャンから缶コーヒーを取り出されたときは、かなりほっこりしました。美味しかったです。

今になって分かる先生のようなお心遣い、この場を借りて御礼申し上げます。

引用・参考文献

- （公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所 2012『難波宮址の研究』第18、大阪
大阪府教育委員会 1970『柏原市国分東条町 河内国分寺跡発掘調査概要』、大阪
大脇 潔 2019「堂内荘厳の考古学—緑釉波文磚と磚仏から—」『古代寺院史研究』菱田哲郎・吉川
真司（編）、東京：pp. 17-35
柏原市教育委員会 1983『片山廃寺塔跡発掘調査概報』、大阪
亀田修一 1983「古代磚より見た大宰府と朝鮮」『大宰府古文化論叢』下巻 吉川弘文館、東京：
pp. 273-309
九州歴史資料館 2002『大宰府政庁跡』、福岡
京都市文化観光局文化財保護課・北白川廃寺発掘調査団 1975『北白川廃寺塔跡発掘調査報告書』、
京都
京都府教育庁指導部文化財保護課 1978『埋蔵文化財発掘調査概報（1978）』京都府教育委員会、京
都

- 熊本市教育委員会 1996『池辺寺 I—百塚遺跡C地点・堂床遺跡発掘調査報告書—』、熊本
 倉吉市教育委員会 1981『史跡伯耆国分寺跡環境整備報告書』、熊本
 国立慶州文化財研究所 2012『四天王寺』I 金堂址、慶州
 狭川真一 1995「大宰府から見た豊前の寺院と古瓦」『古文化論叢』第34集、福岡：pp.70-78
 島田敏男 2009「6基壇上の仕上げ」『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究』奈良文化財研究所
 学報第79冊 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良：pp.82-91
 泉南市教育委員会 1987『海会寺 海会寺遺跡発掘調査報告書』、大阪
 孫儒僊・孫毅華 2001『敦煌石窟全集 建築畫巻』商務印書館（香港）有限公司、香港
 高井悌三郎 1944『常陸国新治郡上代遺跡の研究』桑名文星堂、京都
 竹島卓一 1970『營造法式の研究』中央公論美術出版、東京
 東大寺 2018『東大寺東塔院跡一境内史跡整備事業に係る発掘調査概報1—』、奈良
 豊川市教育委員会 2003『三河国府跡確認調査報告書』、愛知
 奈良国立文化財研究所 1959『興福寺食堂発掘調査報告書』、奈良
 奈良国立文化財研究所 1987『薬師寺発掘調査報告書』、奈良
 奈良文化財研究所編 2002『山田寺発掘調査報告書』奈良文化財研究所、奈良
 八賀 晋 1997「第三部 東山道 第一 美濃」『新修国分寺の研究』第7巻 角田文衛（編）吉川弘
 文館、東京：pp.223-266
 兵庫県宍粟郡山崎町教育委員会・千本屋廃寺発掘調査団 1982『播磨千本屋廃寺跡』、兵庫
 法隆寺昭和資材帳編集委員会 1992『法隆寺の至宝—昭和資材帳—』第15巻 小学館、東京
 宮城県教育委員会 1961『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』、宮城
 宮城県教育委員会・多賀城町 1970『多賀城調査報告』I 吉川弘文館、東京
 宮城県教育委員会・多賀城跡調査研究所 1982『多賀城跡』、宮城
 宮城県教育委員会・多賀城跡調査研究所 2010『多賀城跡 政庁跡 補遺編』、宮城
 向日市埋蔵文化財センター 2005『長岡京址・森本遺跡・野田遺跡』向日市埋蔵文化財調査報告書第
 65集、京都
 向日市埋蔵文化財センター 2011『長岡京址・中海道遺跡』向日市埋蔵文化財調査報告書第83集、
 京都
 （財）和歌山県埋蔵文化財センター・打田町 1992『史跡紀伊国分寺跡保存整備事業報告書』、和歌山

挿図出典

図1：高井悌三郎1944を一部改変、再トレース／図2-1：向日市埋蔵文化財センター2011より一部改変、再トレース／図2-2：向日市埋蔵文化財センター2005より一部改変、再トレース／図2-3：豊川市教育委員会2003より一部改変、再トレース／図3：兵庫県宍粟郡山崎町教育委員会・千本屋廃寺発掘調査団1982より一部改変、再トレース／図4：中川作成／図5：九州歴史資料館2002『大宰府政庁跡』p.225／図6：東大寺2018より一部改変、再トレース